

2 妻木山地区 6 区の発掘調査概要

—妻木晩田遺跡第11次発掘調査—

1. はじめに

今年度実施した妻木山地区 6 区の発掘調査は、重点調査長期計画第 1 期、短期計画第 2 期に該当し、妻木山地区で行う 2 年目の重点調査である。発掘調査区は妻木山 5 区（平成 14 年度調査区）の東側に隣接する 2500m²である。発掘調査は、昨年度に引き続き、妻木晩田遺跡の最盛期にあたる弥生時代後期後葉の集落像の解明を主な調査目的として行った。

2. 第11次発掘調査の概要

妻木山 6 区は東西約 90メートル、南北約 35メートルの東西に細長い調査区である。調査区の南側には第 1 次発掘調査の 3 区の東半分があり、10棟の竪穴住居跡が確認されている。北側には 4 区の東半分があり、第 1 次発掘調査において、竪穴住居跡 9 棟、掘立柱建物跡 4 棟が確認されている。6 区の西側には昨年度の調査区の 5 区がある。地形的には 6 区と 5 区の調査区境が鞍部となっており、東西に連なる別々の小丘陵となっている。

調査区北東隅の約 500m²は急斜面地となっており、隣接する 4 区の遺構も落とし穴やピットを中心としているため、弥生時代後期の遺構密度は低いと考えられたので、調査を行わず現状を維持することにした。

調査区内の堆積は概ね 5 区同様である。戦中戦後の一時期にサツマイモ畑として利用されていたため、表土下の第 1 層は旧耕作土である。また、調査区北東の未調査区との境には部分的に第 2 層の黒褐色土が薄く堆積していたが、遺構検出面はほとんどのところが第 1 層下である。第 1 層は人力により掘り下げを行い、時期決定に有効な土器片や鉄器、石器は出土位置を記録して取り上げた。また、その他の遺物はグリッド毎に取り上げた。第 1 層から出土した遺物のほとんどは、弥生時代後期の土器片である。

今年度の発掘調査で確認した主な遺構は、竪穴住居跡 9 棟、掘立柱建物跡 4 棟、竪穴状遺構 1 基の他に落とし穴、土坑、ピットを多数検出している（図 2）。

3. 竪穴住居跡の調査

6 区で検出した竪穴住居跡 9 棟は、これまでに明らかにされている妻木晩田遺跡の集落像（高田 2003）に良く符合する配置状況である。丘陵頂部を中心に遺構密度の

希薄な空間があり、その空間を囲むように竪穴住居、掘立柱建物が建てられている。これらの竪穴住居跡の配置を踏まえ、集落の移り変わりを明らかにするため、竪穴住居跡は、全て幅 70cm のトレンチを設定して時期を明確にする調査をおこなった。ただし、第 1 次発掘調査で住居跡の約半分が調査されている住居 9（古墳時代前期、SI129）は、既に時期が明確なため上面の検出にとどめた。トレンチ調査の結果、住居 1・2 は V-2~V-3 期、住居 3・8 は V-3 期、住居 4・5 は VI-2 期、住居 6 は V-1 期、住居 7 は V-2 期、竪穴状遺構は V-3 期であることが明らかになった。さらに詳しく調べるために、住居 4・5・竪穴状遺構はベルトを残して全体を掘り下げた。以下、これらの遺構について概要を紹介したい。

住居 4

VI-2 期の竪穴住居跡である（図 1）。竪穴住居跡内部は二段掘りになっており、検出面は不整形な隅丸方形を呈している。長径は 6.2m、短径は 6.1m である。内部は隅丸方形で、一辺 4.95m である。検出面から床面までは最も深いところで 0.87m、加工段は場所により多少幅や深さに差があり、幅 22~52cm、深さ 35cm 程度である。壁に沿って幅 10~20cm の周壁溝が巡っている。東・西・南の各隅 3 か所で長径 50~60cm の柱穴を確認している。北側では確認できていないが、ベルトがちょうど隅にかかっており、ベルト下に柱穴があるものと考えられる。住居跡のほぼ中央部分に中央ピットがあり、その北側に半径 40cm 程度の幅で中央ピットを囲むように炭層が広がっている。焼土跡は 2 か所で確認している。埋土から

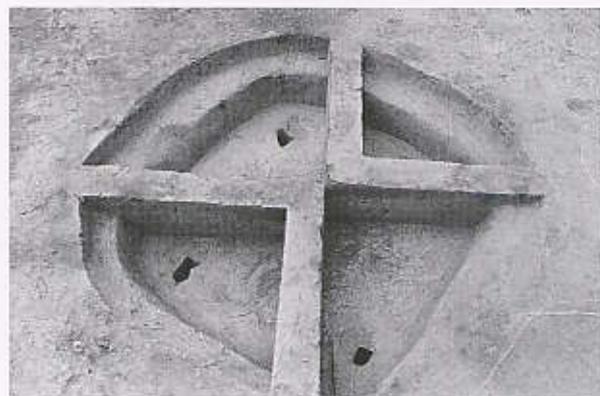


図 1 住居 4

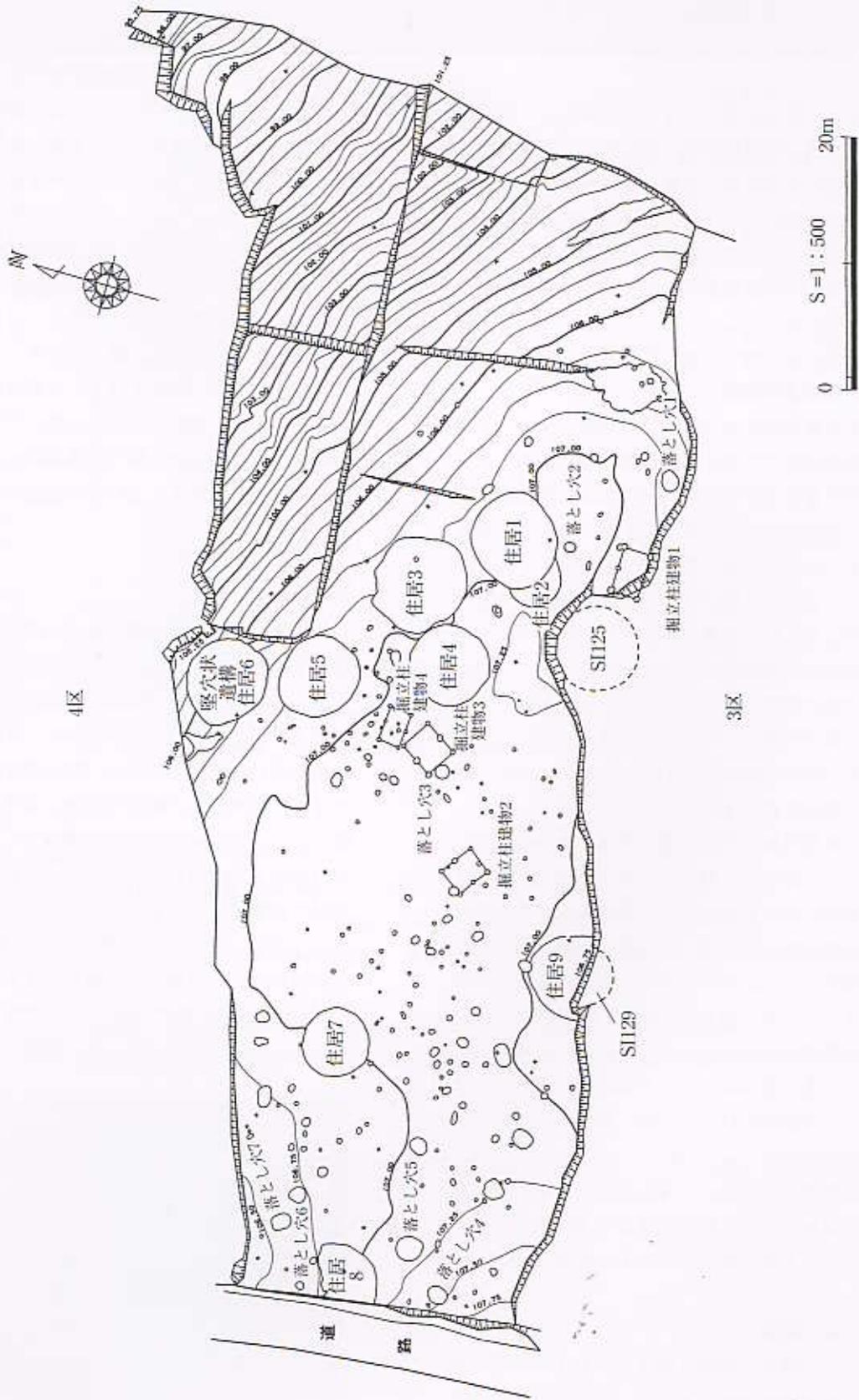
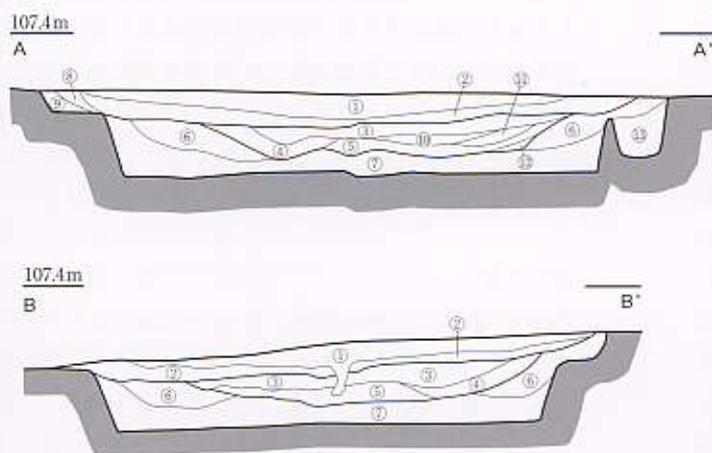
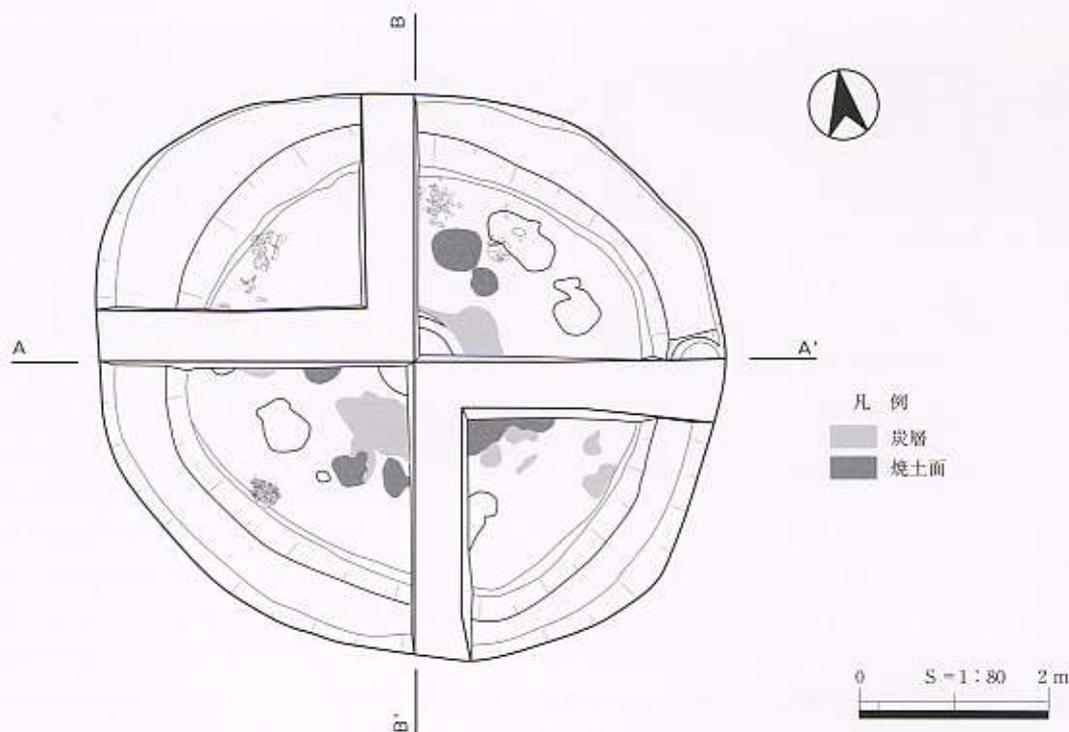


図2 妻木山6区全体図



- ① 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
- ② にぶい黄褐色土 (Hue10YR7/3) 2mm程度の炭粒とバミスを含みしまりが強い
- ③ にぶい黄褐色土 (Hue10YR6/3) 3mm程度の炭粒を含み、粘性・しまりが強い
- ④ 灰黄褐色土 (Hue10YR6/2) 3mm程度の炭粒を含み、粘性・しまりが強い
- ⑤ にぶい橙色土 (Hue7.5YR6/4) 粘性・しまりが強い
- ⑥ 黄褐色土 (Hue10YR5/6) 1cm程度の地山ブロックを含む
- ⑦ にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) しまりが弱く2cm程の地山ブロック、15~20cm程の角礫を含む
- ⑧ にぶい褐色土 (Hue10YR6/3)
- ⑨ にぶい黄褐色土 (Hue10YR6/3) 1mm程の炭粒を含む
- ⑩ 灰黄色土 (Hue2.5Y6/2)
- ⑪ 灰褐色土 (Hue7.5YR6/2) 粘性・しまりが強い
- ⑫ にぶい褐色土 (Hue7.5YR5/3) 粘性・しまりが強い
- ⑬ にぶい黄褐色土 (Hue10YR6/3) 1mm程の炭粒を含む

図3 妻木山6区 住居5

は比較的多くの土器片が出土しており、南東部の加工段では鋤先と考えられる鉄器が出土した(図4-1)。

住居5

VI-2の竪穴住居跡である(図3)。検出面は不整形な隅丸方形を呈し、住居跡内部は二段掘りになっている。検出面は一辺6.1~6.9mで、南北に比べて東西がやや長くなっている。住居跡内部も東西が若干長く5.3m、南北が5.0mの隅丸方形を呈している。検出面から床面までの深さは南側で最大0.9mを測り、加工段は28cm程度の深さがある。支柱穴は3か所で各隅に確認しており、北側

の隅では確認できていないが、ベルトの下にあるものと考えられる。住居跡中央部分には、中央ピットがあり、一部に幅10cm程度の周堤がある。中央ピットの北西側から南東側には焼土跡5か所と薄い炭層が広がっており、炭層には1cmから2cm程度の小さい炭化物が含まれている。南東の壁際には、床面直上に炭化材があった。残りの良い物の中には、長さ2~3cm程の枝と考えられる炭化材もあるが、ほとんどは土壌化していた。北側から北東側の壁際には、床面直上に甕約6個体があったが、これらの内、ほぼ完形に復元できそうなものは2個体程度と考えられる。

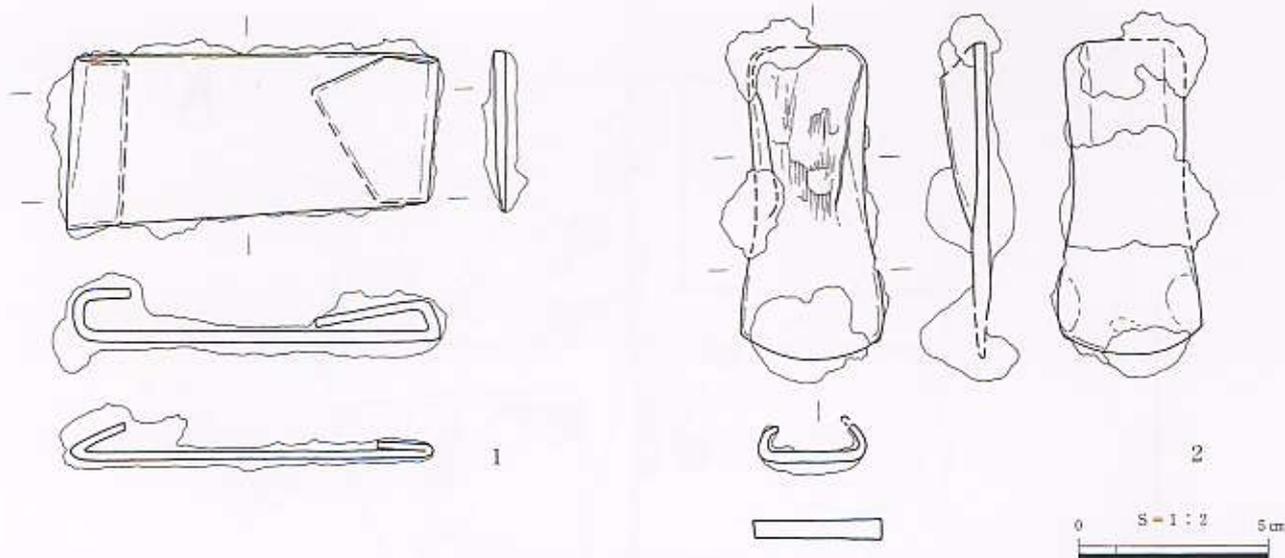


図4 出土鉄製品実測図

また、東側の加工段にはビットが1つあり、ちょうど東西方向のベルトにおよそ半分がかかっている。土層断面では、住居跡との切り合い関係は認められないので、後世に掘られたものではなく、住居に伴う何らかの施設か、もしくはそれ以前に掘られたものと考えられる。

竪穴状遺構

V-3期の遺構で、V-1期の住居6と重複している(巻頭図版)。竪穴状遺構の平面形態は不整形な楕円形で、検出面の長径は6.9m、短径は5.8mである。斜面に立地し、南側の最も深いところで深さ0.83mあり、北側に向けて浅くなる。床面には拳大の礫や3~5mm程度の炭粒を含む焼土が広がっており、周壁溝や中央ビットは伴わない。また、柱穴は2か所にあるが、北東部に偏っており、規則的に並ばない。竪穴部の南側には、直径1.2m、深さ1.4m程度の貯蔵穴3基がほぼ等間隔に壁際に並んでいる。貯蔵穴は床面をほぼ垂直に掘り下げ、南壁を抉るように奥へと掘り込まれている(図5)。こうした状況から、住居跡ではなく簡易な上屋を伴う貯蔵施設の可能性が考えられる。竪穴状遺構の床面近くからは器台の破片やガラス小玉、貯蔵穴内からは袋状鉄斧が1点出土している(図4-2)。

床面となっている焼土面とその下の堆積状況を確認するため、中央部から西側と南北方向に幅50cmのトレンチを設定した。掘り下げたところ、竪穴状遺構の下にさらに住居6があること確認した。床面には炭化材が折り重なって出土したほかは、遺物はほとんど出土しなかった。ただ、竪穴状遺構の床面となっている焼土層下より、V-1の甕の口縁部片が出土した。

今年度の発掘調査により、小丘陵を中心とした竪穴住居跡と掘立柱建物跡、貯蔵施設で構成される居住のまとまりを明らかにすることができた。また、後期後葉の居住単位内における貯蔵施設のあり方を検討する上で良好な資料を得ることができた。

(馬路 晃祥)

参考文献

- 高田純一2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」
馬路編「妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002」、鳥取県教育委員会、34-43頁

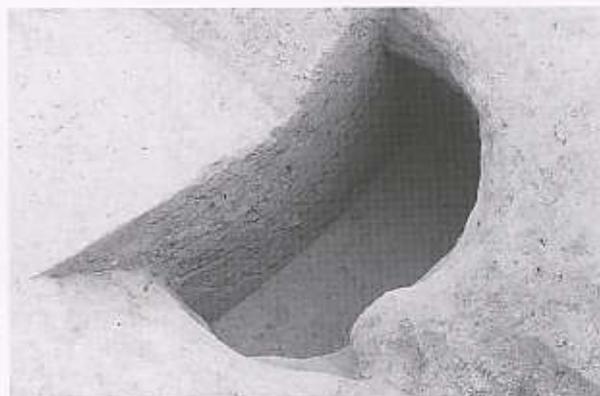


図5 竪穴状遺構に伴う貯蔵穴